

# 図書ニュース

第6号 2009年1月30日発行 大阪府立北野高等学校図書館

## 3年生のクラス担任が薦める本

今回は3年生の各クラス担任にあげていただいた北野生に薦める本を列挙しました。読書の参考にして下さい。

### 3年1組担任

- ① 森毅著『人生20年説』(イースト・プレス) 914 M27 2

「人は一生に4回生まれ変わる。」人生八十年の現在、ひとつの考え方で生きるには長すぎる。当面二十年くらいをひとつの人生と思って、その人生を輝かせることを考える。昔の人生にこだわらなくていいし、次の人生に抑圧されることもない。一プロローグより 北野 58期の先輩が語る人生論です。

- ② 吉村作治・梅原猛著『太陽の哲学を求めて』(PHP研究所)

—エジプトの文明から人類の未来を考える—「ギリシャに始まる人間中心主義の近代文明が破綻しつつあるいま、人類が帰るべき思想と哲学を示す」対談です。

- ③ ファインマン著『ご冗談でしょう、ファインマンさん』(岩波書店)

420 F8 2-1~2

20世紀アメリカの独創的物理学者が、奇想天外な話題に満ちた自らの体験をユーモアたっぷりに語る。読者は悪気のないたくさんの方のいたずらに刺激されるでしょう。

- ④ 西岡常一著『木のいのち木のこころ』(草思社) 521 K5 1-1

薬師寺金堂や西塔などの復興を果たした最後の宮大工棟梁が語る、大自然が育てた「木」の二つの命とは?技術とは何か?ともすると私たちが忘れがちな大切なことを気付かせてくれます。建築学を目指す人にも是非読んでほしい。

- ⑤ 佐野藤右衛門著『桜のいのち庭のこころ』(草思社)

「桜は守りをせな、手入れではあきませんのや。」桜守りと呼ばれ、京都仁和寺出入りの十六代目植木職が語る桜と庭と自然の興味尽きない話。かつての日本人の暮らし方や考え方がみえてきます。

- ⑥ 柳田邦男著『言葉の力、生きる力』(新潮社)

- ⑦ 黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』(講談社) 914 K46 1

### 3年2組担任

- ① 清水建二著『連想式にみるみる身につく 語源で英単語』(Gakken)

語源の知識があると、単語の長期的な記憶、未知語の意味推測が可能になり、語彙が飛躍的に伸びます。

- ② 大西泰斗、ポール・マクベイ著『ハートで感じる英文法』(NHK出版)

文法をひとつひとつ学習した人が、読むのによいです。「なるほど!ネイティブはこのようにとらえてたのだ。」と、丸暗記ではなく心で感じることができ、頭の中で雑然としていた知識が、感覚としてまとまってゆきます。

- ③ Michael Swan 著『Practical English Usage』(OXFORD)

大学に入り、さらに英語を学びたい人は通読しておくべきです。英語学習者のありがちな文法語法上の間違いを、平易な英文で説明しています。「Practical」とあるように、話す・書くことを前提にした実用書です。

- ④ 茨木のり子著『おんなのことば』(童話屋)  
茨木のり子さんの言葉は、年を重ねるにつれ、味わいが増します。一人一人の触れられたくない部分に光を当て、強く厳しく自分を再認識させてくれます。またしっかり前を向いて一歩歩き出す勇気も与えてくれる優しく温かい世界です。人生の節目節目に読んでほしいと思います。
- ⑤ 司馬遼太郎著 ドナルド・キーン、ロバート・ミンツァー訳『対訳 21世紀に生きる君たちへ』  
「自分に厳しく、他人に優しく、たのもしさを持った自律した人間として生きてほしい」という、21世紀を担うあなた方への、司馬さんからの希望のメッセージです。英文でも是非味わって下さい。

### 3年3組担任

- ① 梶井基次郎著『檸檬』(れもん)(新潮文庫ほか)  
31歳で夭逝した北野OBの作家の作品。一度は読んでおこう。
- ② 森毅著『まちがったっていいじゃないか』(ちくま文庫ほか)  
**159 M9 1**  
北野OBの数学者。受験は、「一に要領、二に度胸、三、四がなくて五に運次第」一肩の力を抜かせてくれる人生論。読んで元気になることまちがいなし。
- ③ ドストエフスキー著『カラマーゾフの兄弟』(光文社古典新訳文庫)  
**983 D1 4-1~5**  
新訳が古典作品では異例のベストセラーになった。読めばヒットの理由も納得できるだろう。小説の力を改めて感じさせてくれる作品。
- ④ トルーマン・カポーティー著『ティファニーで朝食を』(新潮文庫)  
オードリー・ヘップバーン主演の映画の原作。映画を観てから読むか、読んでから観るか。どちらも名作。表題作のほか、「クリスマスの思い出」も秀作。心が浄化されることまちがいなし。
- ⑤ レイチェル・カーソン著『沈黙の春』(新潮社) **519 C3 1**  
環境問題の必読書。未来の地球を担う諸君にはぜひ読んでほしい。
- ⑥ 姜尚中著『悩む力』(集英社新書) **159 K18 1**  
みんな悩んで大きくなった。悩むこそ生きる力。一話題のベストセラー。
- ⑦ 茂木健一郎著『脳と仮想』(新潮社) **491 M13 3**  
テレビのアハ体験で一躍有名になった茂木先生の論考。最先端脳科学と人間の心の問題を考察する。

### 3年4組担任

中学時代は外国の小説を次々と読んだ。高校時代は日本の古典にも眼を向けた。大学時代は歴史関係の本を中心に濫読した(文学部学生だったから当然なのだが)。ここでは10代に読んで特に印象に残った作品の一部を紹介する。

- ① ドストエフスキー著『罪と罰』**988 D1 3-6**  
 中学1年の時、3回も読み返したが、内容を十分に理解していたとはいいがたい。しかし就寝前の10～20分間はいつもラスコーリニコフが傍にいた。ペテルブルクに行ってみたいと思っていた。
- ② ヘルマン・ヘッセ著『デミアン』**948 H1 3-6**  
 中学2年の時、ヘッセの有名な作品はほとんど読んだ。『車輪の下』『春の嵐』『郷愁』など。心は常にヘッセの世界を漂っていた。
- ③ 『万葉集』『古今和歌集』『更級日記』『平家物語』『徒然草』など  
 高校時代、古典の勉強が好きになった。百人一首は勿論全部覚えた。教科書に掲載されている文章だけでは満足できなかったので、図書館で全文が載っている本を借りたりした。大学に入学してから、『平家物語』『太平記』は索引を作りながら全て読んだ。『徒然草』は今も座右の書である。
- ④ 加藤周一著『羊の歌』『続羊の歌』(岩波新書など) **289 K26 1~2**  
 受験勉強の合間に読んだ本。昨年なくなった著者の若き日の自伝である。一高から東京帝大医学部に進んだエリート学生で文学青年。夏は浅間山の麓の避暑地に遊ぶ、その贅沢な生活をうらやましく思ったものである。
- ⑤ 島崎藤村著『夜明け前』(岩波文庫など) **081 I1-7 24-2~5**  
 藤村の小説に没頭した時期があった。大学1年の夏、この長編小説を読み、一人でその舞台となった木曾路を訪ねた。馬籠・妻籠は宿場町の面影をよく残していた。
- ⑥ ドストエフスキー著『カラマーゾフの兄弟』**988 D1 3-11~12**  
 大学に入ってすぐに読んだのがこの小説。難しく投げ出したくなったが、かえって忘れられない本になった。
- ⑦ 石母田正著 『中世的世界の形成』(東大出版会・岩波文庫など)  
**210 I9 6-5**  
 著者の名前は高校時代に岩波新書『平家物語』を読んですでに知っていた。日本史専攻を最終的に決めることになった、私にとってはとても大切な本である。

### 3年5組担任

- ① 長嶺超輝著『裁判官の爆笑お言葉集』(幻冬舎新書)  
 裁判員制度が始まる今年。読めば、法廷と言う場所を身近に感じることができるかも。
- ② 海堂尊著『ナイチンゲールの沈黙』『ジェネラル・ルージョの凱旋』(宝島社文庫)  
 ご存知、『チームバチスタの栄光』の続編。個人的には、緊急医療が背景にある『ジェネラル・ルージョの凱旋』の方が迫力があって気に入ってます。

### 3年6組担任

- ① 竹中平蔵著『竹中式マトリクス勉強法』(幻冬舎)  
 大学教授から大臣へ、多方面での活躍の裏には地道な努力が。人生の学習戦略を立てたらいいというメッセージ本です。
- ② ファインマン著『物理法則はいかにして発見されたか』(ダイヤモンド社)  
**421 F2 2**

数学での公理と物理の基本法則の立場の違いを、ファインマンらしい分かり易い語り言葉で記している。

- ③ 山本明利・左巻健男著『新しい高校物理の教科書』（講談社ブルーバックス）  
高校物理を「真面目に」やり直したいと願う人に…。定番の題材にストーリー性を付与し、直感的な分かり易さを重視。
- ④ 伊達宗行著『新しい物性物理』（講談社ブルーバックス）  
学生時代の恩師の著書。巧みな話の進め方や、読み易い文書構成により、物性物理の最先端をとくと堪能しては。
- ⑤ 広瀬立成『超ひも理論と「影の世界」』（講談社ブルーバックス）  
超ひも理論にたどり着くまでの、ていねいな展開により、しっかりと素粒子物理を学ぶことができます。

### 3年7組担任

- ① 『S・ラング 解析入門（原書第3版）』（岩波書店）413 L8 1-1  
高校3年のときに初めて読んだ専門書。そのときは原書第2版だったと思う。高校2年程度（北野なら高1?）の知識で十分理解できる内容。大学で「数学」を勉強しようと思う人に推薦。
- ② 利根川進著『私の脳科学講義』（岩波新書）491 T9 1  
1987年にノーベル生理学医学賞を受賞した利根川博士は、科学者にとって最も大切なファクターは **priority**（優先事項）がしっかりしていることだという。困難に直面したとき、やめようと思うか、それでもがんばって成し遂げようと思うか、これはどのくらい **priority** をしっかりして、集中してやれるかという能力だと。大学で「科学」を勉強しようと思う人に推薦。
- ③ 後藤正治著『生体肝移植—京大チームの挑戦—』（岩波新書）494 G9 1  
移植手術のリスク、健康な生体にメスを入れるリスクを超えて、患者・家族は生きること賭ける。最先端医療の局面で展開される患者・家族と医師・スタッフの緊迫した熱いドラマ。大学で「医学」を勉強しようと思う人に推薦。
- ④ 司馬遼太郎著『新史 太閤記 上・下』（新潮文庫など）918 S15 1-17  
日本史上、もっとも巧みに人の心を捉えた「人蕩し」の天才、豊臣秀吉。知的かつ陽気な秀吉の生き方は、現代の私たちに生きる知恵を与えてくれる。
- ⑤ 夏目漱石著『ころ』(新潮文庫など) 913 N2 8  
大学時代に漱石をよく読んだ。高校の教科書でも必ず勉強する『ころ』。何回も読みましたが、いつも深く感動する。これからも何回も読むでしょう。そんな一冊です。

### 3年8組担任

- ① 講談社ブルーバックス シリーズ  
科学に関する話題をチョット雑学的にかじってみたい人におすすめ。ブルーバックスのコーナーには色んな分野の本があるので、意外と楽しい。まずは好みの本から手始めにどうぞ…。